# 大阪発信雑誌の電子化およびデータベースの試み

## ―廃刊誌『サイクリングツアー』および『旅とサイクリスト』の事例―

# Digitizing and Creating Databases for Magazines Published in Osaka: Working on Discontinued Issues of *Cycling Tour* and *Tours and Cyclists*

貝柄　徹

KAIGARA TORU

近畿の産業遺産　第８号

2014 年 5 月 31 日発行

【論文】

# 大阪発信雑誌の電子化およびデータベースの試み
## -廃刊誌『サイクリングツアー』および『旅とサイクリスト』の事例-

## Digitizing and Creating Databases for Magazines Published in Osaka: Working on Discontinued Issues of *Cycling Tour* and *Tours and Cyclists*

貝柄　徹*　　大手前大学**

要旨：1956 年から 1972 年まで大阪で出版していた『サイクリングツアー』誌と『旅とサイクリスト』誌は，国立国会図書館にも保管されていない．この時期のスポーツ車の発展過程を考える上でも重要な文献であることからこの２誌の電子化およびデータベースを試みた．

キーワード：電子化，データベース，雑誌，廃刊，サイクリング

## I．はじめに

1997 年の京都議定書（気候変動に関する国際連合枠組条約）以来，地球温暖化の原因となる二酸化炭素（$CO_2$），メタン（$CH_4$），一酸化二窒素（$N_2O$）などの削減が求められることに並行して「地球環境に優しい乗り物」として自転車が再認識され始めた．

重荷用運搬車のように業務用であった自転車が，谷田貝（2009，2011）が論考したように 1960 年代から主婦を対象とした「買い物に便利でしかも美容と健康に役立つ」自転車の出現によりシティサイクルが分化してゆき，1970 年代に入り車輪径が 18～20 インチの小径ループ型自転車「ミニサイクル」という日本独自の進化をとげる．その一方で休日や余暇を利用したスポーツ用としてのサイクリング車が別の系統で進化するが，近年では，環境や健康の観点から「自転車通勤」や「通勤サイクリング」といった概念（赤池，2011 など）まで生まれ，境界が曖昧になりつつもある．「自転車ツーキニスト」（疋田，2003 など）という語も市民権を得たと言える．現在，自転車プロショップの顧客層といえる自転車趣味人は約 16 万人だが，スポーツ気分で自転車に乗る広義の自転車愛好者数は 160 万人という試算（STK66，2012）もある．

1950 年代中頃にスポーツ車の出現とともに第 1 次サイクリングブームがおきた 1956 年から 1972 年までの 17 年間大阪で出版していた『サイクリングツアー』誌と『旅とサイクリスト』誌は，この時期のスポーツ車の発展過程のみならず，社会状況を鑑みる上で，重要な大阪発信の雑誌文献といえる．にもかかわらず，国立国会図書館にも保管されていない．本稿ではこの２誌の電子化およびデータベースの試みについて取り上げる．

* KAIGARA Toru
** Otemae University
(2013年10月31日受理)

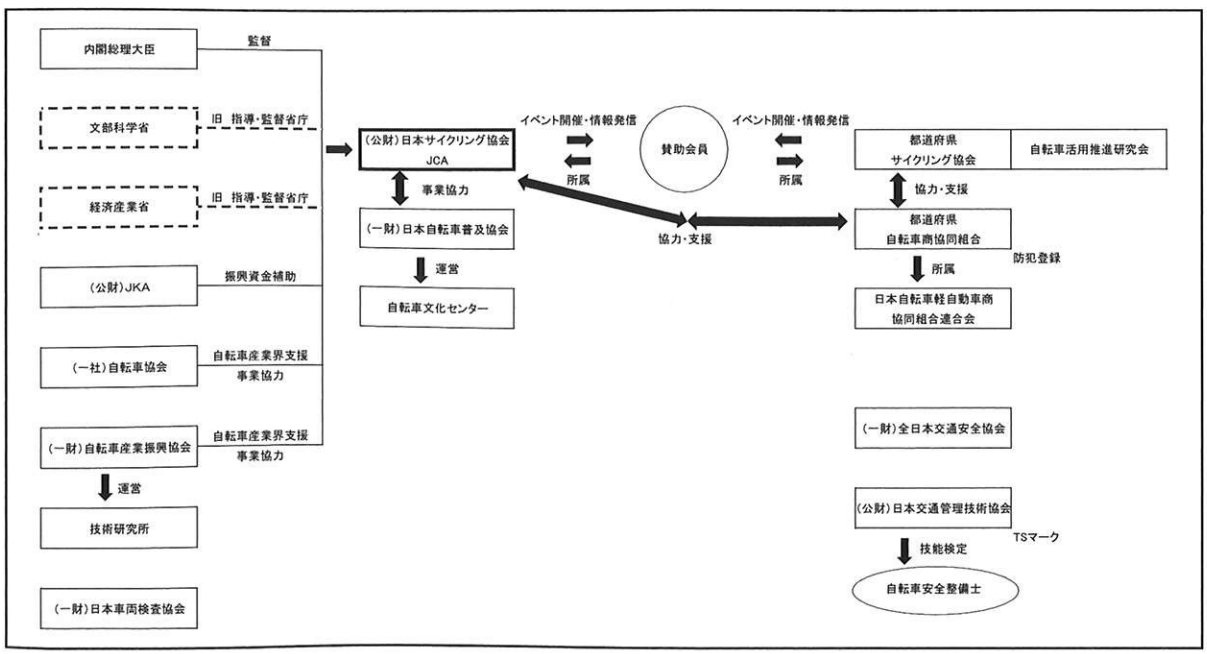


図1　公益財団法人日本サイクリング協会の関連組織とその体系図

表1　1950年代以降の自転車関連雑誌

| 雑誌 | 出版社 | 創刊年 | 休・廃刊年 | |
|---|---|---|---|---|
| サイクル | サイクル時報社 | 1953 | 1962 | 「New Cycling」の前身 |
| 競輪ファン [1] | 日本自転車振興会 | 1955 | 1958 | 「月刊競輪」の前身 |
| サイクリングツアー | サイクリング・タイムス社 | 1956 | 1962 | 「旅とサイクリスト」に変更 |
| 旅とサイクリスト | 大阪サイクリング協会 [2] | 1962 | 1972 | 「サイクリングツアー」の後継（巻号引き継ぎ） |
| New Cycling（ニューサイクリング） | サイクル出版 [3] | 1963 | | |
| CYCLE SPORTS（サイクルスポーツ） | 八重洲出版 | 1970 | | |
| Cycle Press JAPAN（サイクルプレスジャパン） | インタープレス | 1974 | | |
| 自転車競技マガジン | ベースボールマガジン社 | 1976 | 1990 | |
| 月刊競輪 | 日本自転車振興会 [4] | 1976 | 2012 | |
| 自転車・バイク駐車場 | 再開発振興 [5] | 1979 | 2010 | 「自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス」に変更 |
| BiCYCLE CLUB（バイシクルクラブ） | 東邦出版社 [6] | 1985 | | |
| SPORTS BICYCLE（スポーツ　バイシクル） | 山と渓谷社 | 1988 | 1992 | |
| バイシクルビジネス | グローバル | 1991 | 1995 | 「サイクルビジネス」に変更 |
| Cyclism echo（シクリスム　エコー） | 日本アマチュア自転車競技連盟 [7] | 1992 | | |
| FUNRIDE（ファンライド） | ランナーズ | 1993 | | |
| CYCLE FIELD（サイクルフィールド） | 山海堂 | 1993 | 1996 | |
| サイクルビジネス | グローバル | 1995 | | 「バイシクルビジネス」の後継（巻号引き継ぎ） |
| けいりんマガジン | 白夜書房 | 1995 | 2013 | |
| 月刊競輪バンク | 勁文社 | 1995 | 1996 | |
| FIELDS BIKERS（フィールドバイカーズ） | フィールドライフ | 1996 | 2002 | |
| MTB WORLD（マウンテンバイクワールド） | 枻出版社 | 1997 | 2002 | |
| BICYCLE NAVI（バイシクルナビ） | 二玄社 [8] | 2000 | | |
| MTB MAGAZINE（MTBマガジン） | ネコ・パブリッシング | 2000 | 2007 | |
| BE-CYCLE（ビーサイクル） | ネコ・パブリッリング | 2000 | 2001 | |
| 散歩自転車、旅自転車 | 枻出版社 | 2002 | 2004 | |
| ROADBIKE magazine（ロードバイクマガジン） | ネコ・パブリッシング | 2002 | 2003 | |
| Bicycle21（バイシクル21） | ライジング出版 | 2003 | | |
| Noroona（のろ～な） | のろ～なくらぶ | 2004 | 2004 | |
| CICLISTI（チクリスティ） | 飛鳥新社 | 2004 | 2005 | |
| 自転車人 | 山と渓谷社 | 2005 | 季刊 | |
| 自転車生活 | 枻出版社 | 2005 | 2011 | 「BICYCLE PLUS」に変更 |
| 自転車日和 | 辰巳出版社 | 2005 | 季刊 | |
| ロードバイク　ライフ | 枻出版社 | 2005 | 2011 | |
| CICLISSIMO（チクリッシモ） | 八重洲出版 | 2006 | 不定期 | |
| Bicycle magazine（バイシクルマガジン） | ネコ・パブリッシング | 2006 | 2011 | 「BICYCLE NAVI」誌に統合 |
| TOKYO　自転車人 | 山と渓谷社 | 2006 | 不定期 | |
| PARKING TODAY（パーキング・トゥデイ） | ライジング出版 | 2008 | 季刊 | |
| Bicycle Beauty（バイシクル・ビューティー） | ボイス・パブリケーション | 2009 | 不定期 | |
| PEDAL SPEED（ペダルスピード） | ネコ・パブリッシング | 2009 | 不定期 | |
| MTB日和 | 辰巳出版 | 2009 | 不定期 | |
| LOOP Magazine（ループマガジン） | 三栄書房 | 2009 | 不定期 | |
| 旅する自転車の本 | 枻出版社 | 2009 | 不定期 | |
| 自転車・バイク・自動車駐車場　パーキングプレス | サイカパーキング | 2010 | | 「PARKING PRESS」と「自転車・バイク駐車場」の統合 |
| 自転車と旅 | 実業之日本社 | 2010 | 不定期 | |
| CYCLO TOURIST（シクロツーリスト） | グラフィック社 [9] | 2010 | 不定期 | |
| BICYCLE PLUS（バイシクルプラス） | 枻出版社 | 2011 | 不定期 | 「自転車生活」の後継 |
| BSM (Bicycle Style Magazine) | 笠倉出版社 | 2011 | 年3回 | |
| MTB only（マウンテンバイクオンリー） | 造形社 | 2011 | 不定期 | |
| RANDONNEUR（ランドヌール） | グラフィック社 [9] | 2012 | 不定期 | |
| Cyclo Graph（シクロ・グラフ） | ホビージャパン | 2012 | 不定期 | |

1）1955年8月～1958年3月 だが不定期刊
2）1965年1月からサイクリング・タイムス社
3）1972年1月からペロ出版，2002年4月からエヌシー企画，2012年2月より月刊ニューサイクリング（現在に至る）
4）2008年5月からJKA
5）2007年からサイカパーキング
6）1995年4月から枻出版社
7）1993年から日本自転車競技連盟
8）2011年からボイス・パブリケーション
9）2013年7月からひびき出版

## II. 雑誌出版の背景

1950年代中頃，スポーツ車の出現により，第1次サイクリングブームがおき，全国に同好の集まりであるサイクリングクラブが誕生する．政府は1961年6月に「スポーツ振興法」を制定し，その第2章「スポーツの振興のための措置」の第10条「国及び地方公共団体は，心身の健全な発達のために行なわれる徒歩旅行，自転車旅行，キャンプ活動その他の野外活動を普及奨励するため，コースの設定，キャンプ場の開設その他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない．」と自転車旅行（サイクリング）を国の奨励するスポーツとして明文化した．これにより第2次サイクリングブームがおき，1954年10月1

日に発足した日本サイクリング協会[1]（略称 JCA = JAPAN CYCLING ASSOCIATION）は，各都道府県に協会の設立を呼びかける．日本サイクリング協会（1956）によると大阪（1955.6.13 設立）（以下，「設立」を省略）をはじめ，愛知県（1955.6.23），福岡県（1955.10.6），東京（1955.11.2），京都（1955.12：日は未記載），兵庫県（1956.3.7），広島県（1956.3.20），徳島県（1956.5.20），新潟県（1956.5.22），岐阜県（1956.5.28），静岡県（1956.7.26），神奈川県（1956.9.6），栃木県（1956.9.6），岡山県（1956.10.6），埼玉県（1956.10.2）の 15 府県にサイクリング協会が設立した．日本サイクリング協会は，1964 年 5 月 22 日，文部省（現文部科学省）認可のサイクリングの普及推進を目的とする公益事業を行う財団法人となる．その後，1975 年には自転車等関連機械工業の振興にも寄与するものとして，通商産業省（現経済産業省）からも認可され，文部科学省 との共管の団体となる．

政府機関のみならず，法的には軽車両に属する工業製品であることから製造，販売，整備，防犯，安全などの観点から，さらに自転車競技の一側面である公営ギャンブルとしての競輪までといったかなり多くの諸団体との連携が結ばれていった（図 1）．本図は日本サイクリング協会との関係を示したものであるが，競輪関係にはさらに（一財）全国競輪選手共済会，（公財）車両競技公益資金記念財団，（一財）日本サイクルスポーツセンター，（公財）車両情報センター，（公財）日本自転車競技会，（公財）日本自転車競技連盟，（社）全国競輪施行者協議会などの団体が連携してくる．

かように多岐な関連団体と連携している業界であり，それぞれが発信する広報物もかなり多く，すべてを網羅することは難しい．本稿では一部の愛好者向けではあるが，一般に入手可能な専門雑誌に焦点を当てる．

明治から大正期の専門雑誌については大津（1985a, 1985b）や真船（1986）が紹介をしているが，現物について多くは未見とあり，ここでは表 1 に第 1 次サイクリングブームのあった 1950 年代以降の自転車やサイクリングに関する雑誌を書き出した．現在では休刊・廃刊や統合したものも多い．2000 年代に入ってからは，「健康」，「環境」，「ファッション」の観点から様々な読者層を対象とした雑誌が創刊されるが，「不定期刊」とする「ムック」（雑誌と書籍を合わせた出版物）が大多数を占める．趣味の多様性，幅広い読者層，社会の変化などを勘案した場合，継続的に毎月発刊していくことが難しく，それに対応するための出版社側の策といえる．

自転車産業の町として名高い大阪府堺市をはじめ，大阪市内，大阪府下には自転車部品，関連製品の製造メーカーが多く存在している（竹内, 1960；田中, 2009 など）．しかし出版物に関しては，そのほとんどが東京発信である．表 1 で在阪の出版社は，『サイクリングツアー』（1956 年～1962 年），『旅とサイクリスト』（1962 年～1972 年）および『Noroona（のろーな）』（2004 年～2004 年）だけと寂しい．久々の在阪出版社による雑誌であった『Noroona（のろーな）』は 2 号ほど刊行しただけで，1 年を待たずに休刊となっている．

## III. 『サイクリングツアー』誌から『旅とサイクリスト』誌へ

『サイクリングツアー』誌は，大阪サイクリング協会（1955 年創立）の創設メンバーで常任理事も勤めた清水庸之（しみずやすゆき）氏[2]が，大阪市阿倍野区阿部野筋 4-100 におこしたサイクリング・タイムス社発行の雑誌で，1956 年 8 月に創刊した（表 2）．その後 1962 年 3 月号（通巻 66 号）まで発刊し，1962 年 7 月号（通巻 67 号）より『旅とサイクリスト』誌と改まる（表 3）（1971 年 2 月 1 日より道路建設による立ち退きで大阪市阿倍野区三明町 2-7-24 に事務所転居（通巻 168 号に掲載））．

最初の『旅とサイクリスト』誌は，創刊号という形態をとらず，『サイクリングツアー』誌の改題として，巻，号および通巻号の数字を引き継いでいる．本号の後書きに「おわびとお願い」とした一文が載る．「過去七年にわたりご愛読を頂きましたサイクリング・ツアー［中点ママ］を今回“旅とサイクリスト”に改題しスタイルをかえて発行することになりました．準備として三カ月休刊しました（以下略）」

誌名を替えただけではなく，発行元も変わる．本号の奥付は，「発行所　大阪市北区梅田町新阪神ビル大阪サイクリング協会，発売元　日本交通公社関西支社，編集発行人　清水庸之」となっており，前身である『サイクリングツアー』誌の発行元であった「サイクリング・タイムス社」ではなく，「大阪サイ

表2　『サイクリングツアー』誌の発行状況と号数

| 年 | 1956 | 1957 | 1958 | 1959 | 1960 | 1961 | 1962 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1月号 | | 6 | 18 | 30 | 42 | 53 | 64 |
| 2月号 | | 7 | 19 | 31 | 43 | 54 | 65 |
| 3月号 | | 8 | 20 | 32 | 44 | 55 | 66 |
| 4月号 | | 9 | 21 | 33 | 45 | 56 | |
| 5月号 | | 10 | 22 | 34 | 46 | 57 | |
| 6月号 | | 11 | 23 | 35 | 47 | 58 | |
| 7月号 | | 12 | 24 | 36 | 48 | 59 | |
| 8月号 | 1 | 13 | 25 | 37 | 49 | 60 | |
| 9月号 | 2 | 14 | 26 | 38 | 50 | 61 | |
| 10月号 | 3 | 15 | 27 | 39 | 51 | 62 | |
| 11月号 | 4 | 16 | 28 | 40 | 52 | 63 | |
| 12月号 | 5 | 17 | 29 | 41 | 欠 | | |

クリング協会」となる.

1955 年に設立した大阪サイクリング協会[3)]（略名：OCA）は，すでに協会ニュースを発行していたが，『サイクリングツアー』誌の創刊号（1956 年 8 月号，通巻 1 号）から小さな記事ではあるが，「協会だより」（その後，「OCA 便り」を掲載している．1958 年 11 月号（通巻 28 号）には「OCA のページ」として誌面を割いている．改題して発行した『旅とサイクリスト』誌では，「OCA ニュース」として 1〜2 ページ設けている（1962 年 7 月号（通巻 67 号）〜1964 年 8 月号（通巻 89 号））．しかしこのことが，雑誌読者と協会会員の間で誤認を引き起こすことになる．

1962 年 11 月号（通巻 71 号）の「声」欄で「本誌の年極読者になると OCA 会員になるのではないか？」との読者の質問に「現在のところ別個になっておりますので，会員になるためには別途会費をお払い込み下さい.」とある．

ただ 1963 年 1 月号（通巻 73 号）の「バックミラー」欄で，「OCA 会費の改正について従来本法［ママ］の外にニュースを別に発行していましたが，会員の方には二重になったものと考えられる方もいるので，今年度より一律にして会費年六〇〇円として本誌を送ることにしたいし，年極読者は自動的に会員とする.」また後段には「今月に限り OCA 会員に本誌を全部送りますので OCA ニュースはお送りしませんからご了承下さい.」という記載もあり，混乱が垣間見える．

これらの打開策として 1963 年 5 月号（通巻 76 号）の「お知らせ」欄に「今後 1 カ年購読の方に対して自動的に大阪サイクリング協会会員に登録することに致しました．購読料と会費の 2 重払いのご負担がないようにしたものです」とするが，合意は得られなかった．1964 年 11 月号（通巻 92 号）の「お知らせ」欄において「長い間大阪サイクリング協会準機関誌として親しんで頂きましたが，今回協会の方針も変わりましたし，本誌本来の姿に戻る時期も参ったようです．それで新年号よりかつての“サイクリング・ツアー”［中点ママ］誌と同様にサイクリングタイムス社を復活し，同社より“旅とサイクリスト”誌を引きつづき発行することと致しました.」として，1965 年 1 月号（通巻 94 号）より前身である『サイクリングツアー』誌のサイクリング・タイムス社に戻した．本号の「ご挨拶」欄では「主幹　清水敏行（旧名 庸之）」と改名し，奥付は「発行所　大阪市アベノ区アベノ筋 4 ノ 100 サイクリング・タイムス社編集発行人　清水敏行，印刷所　株式会社栄文堂」となっている．ただこの改名も本号だけで，次号より「清水庸之」と戻っており，その経緯についての記載はない．発行所の住所表示については 1965 年 2 月号（通巻 95 号）から「大阪市阿倍野区阿倍野筋 4 の 100」と漢字表記になっている．

大阪サイクリング協会ニュースの編集に永年携わっていた森本昭治氏への聴き取り調査から，この頃はサイクリングブームも一段落し，大阪サイクリング協会は 1965 年から 1967 年まで休眠状態でニュース発行もないことがわかった．そのような中で，数少ない情報源のひとつであったが，一般書店での販売はなく，協会事務所や一部の自転車店でしか購入

表3　『旅とサイクリスト』誌の発行状況と号数

| 年 | 1962 | 1963 | 1964 | 1965 | 1966 | 1967 | 1968 | 1969 | 1970 | 1971 | 1972 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1月号 | | 73 | 83 | 94 | 106 | 119 | 131 | 143 | 155 | 167 | 179 |
| 2月号 | | 74 | 84 | 95 | 107 | 120 | 132 | 144 | 156 | 168 | 180 |
| 3月号 | | 75 1) | 85 | 96 | 108 | 121 | 133 | 145 | 157 | 169 | 181 |
| 4月号 | | | 86 | 97 | 109 | 122 | 134 | 146 | 158 | 170 | 182 |
| 5月号 | | 76 | 87 | 98 | 110 | 123 | 135 | 147 | 159 | 172 | 183 |
| 6月号 | | 77 | 欠 3) | 99 | 111 | 124 | 136 | 148 | 160 | 173 | |
| 7月号 | 67 | 78 | 88 | 100 | 112 | 125 | 137 | 149 | 161 | 174 | |
| 8月号 | 68 | 79 | 89 | 101 | 114 | 126 | 138 | 150 | 162 | 175 | |
| 9月号 | 69 | 80 | 90 | 102 | 115 | 127 | 139 | 151 | 163 | 176 | |
| 10月号 | 70 | 81 2) | 91 | 103 | 116 | 128 | 140 | 152 | 164 | | |
| 11月号 | 71 | | 92 | 104 | 117 | 129 | 141 | 153 | 165 | 177 | |
| 12月号 | 72 | 82 | 93 | 105 | 118 | 130 | 142 | 154 | 166 | 178 | |
| | | | | | 113 4) | | | | | 171 5) | |

1) 1963年3月号は欠号。4月号が「3・4月合併号」（通巻75号）として発行（表題字は「4月」と表記）。
2) 「10・11月合併号」（通巻81号）として発行（表題字も「10・11月合併号」と表記）。
3) 88号（次号）で「都合に依り6月号中止」と記載あり。
4) 通巻113号（第11巻第8号）は「増刊ツアー読本」（創刊満10周年記念増刊号）として発行（1966（昭和41）年7月25日発行）。
5) 通巻171号（第16巻増刊号）は「1971年別冊旅とサイクリスト」として発行（1971（昭和46）年4月20日発行）。

できず，サイクリング・タイムス社といっても清水氏個人による編集で，当初より発行の遅れも多々あったと聞く．

刊行にも支障を来したことがある．例えば，「二，三月号と発売が遅れて御迷惑をおかけしたことを御詫び申し上げます」（1960年3月号：通巻44号）や「遅れに遅れとうとう十一月と十二日［ママ：十二月のこと］を合併せざるを得なくなりました，加うるに印刷経費の高騰，用紙の値上にあおられ散々で…」（1961年11月・12月号：通巻63号）などのお詫び文が載る．

また「本号から増頁する予定でしたが，編集企画の都合と，印刷の不手際から増頁を中止しました．もっと企画をねり，3月号から行います」（1963年1月号：通巻73号）および（「次（3月）号より増頁をいたします」（1963年2月号：通巻74号）と記載しながらも「印刷所の都合で3月号を休刊しました．本号は3・4月号合併号として増頁しました」（1963年4月号：通巻75号）とある．また翌年にも「都合により6月号を中止致しました事をお詫び申し上げます」（1964年7月：通巻88号）と欠号が発生している．

ただこれらの混乱もその後，徐々に解消している．『旅とサイクリスト』誌の発行部数に関しての資料がないが，1966年2月（通巻107号）に，「大取次店“東京出版K・K”扱いになりましたので本誌をお求めの節は最寄りの書店え［ママ］お申し込み下さい」とあり，創刊10年目に書店購入が可能となっている．これにより販路が拡大した．

1966年8月号（通巻114号）の奥付より大阪以外に「東京支局　東京都文京区根津1丁目32番13号東部輪業通信社内」，「仙台支局　仙台市宮城野町1丁目19番32号　東部輪業通信社内」，「名古屋支局名古屋市中村区志摩町4の18　名古屋輪界新聞社内」の記載がある．そして1966年7月25日発行の『増刊ツアー読本』（創刊満10周年記念増刊号）の販売を期に全国へ販路を広げた．印刷，紙質も格段によくなっていくが，1972年5月号（通巻183号）を最後に廃刊となる．最後は資金繰りが悪化したと聞く．最終号（通巻183号）の誌面において，休刊や廃刊のお知らせはなく，突然のように終了する．

## IV. 雑誌のデータベースと電子化

### (1)『New Cycling（ニューサイクリング）』誌の事例

現在まで継続している自転車関連の最古の雑誌は，1963年創刊の『New Cycling（ニューサイクリング）』誌であり（表1），自転車愛好家の間ではバイブル的な雑誌といえる．情報を得る手段の乏しい時代には，前述したような関連団体の動向や国内外の新製品の紹介などもあり，雑誌ではあるが，資料価値の高いものでもあった．そのため過去の記事を探すことが多いにもかかわらず，年間の総目次が掲載されるのみで，検索が難しい状況であった．

そこで，ニフティ株式会社が運営していたパソコン通信サービスNifty-serveのシクロツーリズムフォーラム（FCYCLO）の有志が，『ニューサイクリング』誌の創刊号からNo.457まで（1963年1月号～2001年12月号）までの目次をCSVファイル形式で入力したデータベース（ニューサイクリングデータベース：NCDB400A.LZH，NCDB1997.LZH，NCDB1998.LZH，NCDB1999.LZH，NCDB2000.LZH，NCDB2001.LZH）を作成した．現在では以下のインターネット上でダウンロードが可能で，貴重かつ利便性が高い．

http://www.eonet.ne.jp/~takubow21/cyclo/newsai.htm（2013年8月）

かてて加えて2000年，『ニューサイクリング』誌の出版元が1963年1月号（創刊号：通巻1号）から1973年3月号(通巻100号）までのすべてを電子化（PDF版）した第1集CD-ROMを，その後，順次，第6集（2009年8月号：通巻550号）まで販売した．

『ニューサイクリング』誌の前身である『サイクル』誌（1953年～1962年）（表1）は，国立国会図書館に所蔵されており，閲覧および文献複写依頼が可能である．2002年より国立国会図書館は，所蔵する資料を近代デジタルライブラリー

http://kindai.ndl.go.jp/上で順次，公開しており，今後，インターネットでの閲覧，ダウンロードの可能性も秘めている．

### (2)『サイクリングツアー』誌と『旅とサイクリスト』誌での試み

『サイクル』誌より3年ほど遅れての創刊であるが，『サイクリングツアー』誌（1956年～1962年），その後に引き継がれた『旅とサイクリスト』誌（1962年～1972年）は，大阪発信の刊行物で，編集者の清水氏のいう「協会の準機関誌」的な要素をもっており，当初，一般の書店で販売していなかったため，国立国会図書館にも全く所蔵されていない．

ただ大阪には部品製造メーカーや自転車メーカーも数多く，大阪サイクリング協会は全国でも最も早い設立（1955.6.13設立）でもある．小売店のみならず，製造メーカー，卸業者などが企業周知の目的もあり，本誌に広告を掲載している．情報およびその手段が限られた時代だったため，この時期に愛好家だった人々にとってはバイブル的な存在でもあり，本誌の知名度はかなりのものであった．時代的に印刷，製本ともに問題があり，半世紀も経過する間に大半の愛好家は処分してしまい，知名度はあるものの，その存在は限られたものとなってしまった．昨

今では，数冊単位では古書肆やスワップミートなどで目にかけることもあったが，通巻揃って入手することはほぼ不可能な状況であった．一般財団法人自転車普及協会の自転車文化センター[4]（東京都千代田区）にかなりの所蔵があることが判明したが，それでも一部が白黒コピー版である．また欠号もある．

大阪サイクリング協会の常任理事でもあった西本啓氏が転居に伴い，『旅とサイクリスト』誌を処分することがわかり，まとまって譲り受けることができた．また編集者の清水庸之氏の元で編集に携わっていた沢田伸氏から寄贈されたものが一般財団法人自転車センターの関西サイクルスポーツセンター（大阪府河内長野市）を経て，武澤勇氏（サイクルショップタケザワ：大阪市淀川区）に渡り，その一部が残っていた．『旅とサイクリスト』誌の前身の『サイクリングツアー』誌は，発行当時でも入手しやすいものではなく，その存在を知る者も多くない．そのような中で，大阪サイクリング協会リーダー会の松丸雅亮氏がその一部を保管していることが判明した．結局，現状では，『旅とサイクリスト』誌はすべて原本から電子化が可能であったが，『サイクリングツアー』誌の一部に関しては，白黒コピー版（自転車文化センター所蔵）から二次複写せざるを得なかった．

雑誌の電子化については，主に記事内容の閲覧を考え，本文は二値化（一部，全面写真ページは写真モード），表紙・裏表紙のカラー写真ページはフルカラーでスキャンした．また二値化スキャンでは本文の写真が判読しにくいものに関しては，写真モードでもスキャンしており，同じページを 2 種類のモードでスキャンしている箇所もある．

今回のスキャンに関しては，画像処理ソフトを用いての加工，修正は時間的制約もあって実施していない．また 2007 年のアマゾン・キンドルの販売以降のいわゆる「自炊」に適した両面読み込みが可能なドキュメントスキャナも使用していない．同機であれば，効率的な電子化が可能であるが，書籍を裁断する破壊型のスキャンであり，今回はこれを避け，書画カメラやフラットベッド型のイメージスキャナを使用した．

ただ当時の印刷，製本技術の関係上，ページ番号記載箇所の裁断や綴じ代が均一でないため並行に開く事ができない号も多い．また入手したものの中には合本するためのパンチ穴による一部文字の欠落，ページ隅の破損，多少の書き込み，線引きなどもあるが，修正・修復は加えていない．

『サイクリングツアー』誌および『旅とサイクリスト』誌については，『New Cycling（ニューサイクリング）』誌のように年間総目次の掲載が基本的にない（1966 年，1967 年，1968 年，1970 年のみそれぞれの 12 月号に掲載）．そのため，前述のニューサイクリングデータベースに倣って各号の目次を CSV ファイルで入力した．

最後に誤植についてであるが，1963 年 2 月号の目次が「’63 年 1 月号」などのように軽微な誤植もあるが，混乱を来しかねない通巻号数に関しては，それを一覧にした（表 4）．

表4　『旅とサイクリスト』誌の号数に関する誤植

| | | 正しい号数 | 表紙・裏表紙 | 目次 | 奥付 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1962年 | 12月号 | 72 | 72 | − | 71 |
| 1963年 | 1月号 | 73 | 73 | − | 72 |
| | 2月号 | 74 | 74 | − | 73 |
| 1971年 | 5月号 | 172 | 172 | 172 | 171 |
| | 6月号 | 173 | 173 | 173 | 172 |
| | 11月号 | 177 | 176 | 178 | 177 |
| 1972年 | 1月号 | 179 | 179 | 178 | 179 |

ハッチが誤植箇所
「−」：記載なし

## V. おわりに

1950 年代中頃，サイクリングがブームとなる時期の大阪で，サイクリング協会の会員をはじめ，一般愛好家のために雑誌を創設し，国内外の情報を伝えた清水庸之氏の情熱には驚かざるを得ない．氏は当時 30 歳代で，孤軍奮闘していたのであろう．その後，沢田伸氏，滝井精一氏，北畠昭氏などが順次，編集に協力し，また協会会員や一般愛好家の寄稿もあって 17 年にわたって出版を続けた．残念ながらこれが途絶えるのは資金面のみならず，協会の組織，読者の嗜好の変化など様々な要因が絡んでいたに相違ない．それでも大阪の地から発信した先人たちの軌跡は残したい．

にかかわらず，自転車やサイクリング分野に特化した博物館や図書館は以下の 3 カ所に限られている．公的な博物館は，自転車部品メーカーの株式会社シマノが 1992 年に開館した「自転車博物館サイクルセンター」[5]（公益財団法人シマノ・サイクル開発センター）（大阪府堺市）のみである．自転車および部品の地場産業の地ではあるが，それに特化したものではなく，国内外の自転車を約 300 台実物展示の他，図書室も完備している．しかしその開館目的が「自転車が人の健康や環境保全に役立つすばらしい道具であることを広めて，日本の自転車産業の発展と国民生活の向上を目指すこと」（Web より）であり，研究的な側面より地域に開かれた多目的な施設といえる．

また自転車輸出入会社の八神史郎氏が 1989 年に開館した「自転車資料館サイクル・ギャラリー・ヤガミ」[6]（愛知県名古屋市）は，1818 年製のドライジーネ（カール・フォン・ドライスによる自転車の原型）から 1950 年代までのきわめて貴重な海外の自転

車約 200 台および資料を保存した自転車文化史の私設資料館である.

本稿 IV 章 (2) で紹介した自転車文化センター (一般財団法人日本自転車普及協会) (東京都千代田区) は, 自転車に関する情報 (和書 6000 点, 洋書 2000 点を所蔵) を集めた「自転車文化センター情報室」, 自転車の歴史と変遷を学習する「自転車広場」, 自転車の仕組みと原理を体験する「北ノ丸サイクル」からなる複合施設であるが, 和書図書目録も Web 上での検索が可能で, この中では最も研究機関としての側面をかねもつ.

現状では文書資料に関しては上記の自転車文化センターが充実しているが, 図書館ではないため, 文献複写等のサービスには限界がある.

本稿で取り上げた雑誌は, 国立国会図書館にも所蔵されておらず, 電子化およびデータベースという形にして残す意義があると考える. 文献として利用するためには, 編集者の清水庸之氏と関係が深く, また一時期ではあるが, 出版元であった大阪サイクリング協会が電子媒体の版権を取得することが肝要であろう. そうすることでひろく利用者に門戸を広げることが可能となり得る. この電子媒体とデータベースが自転車文化史の文献研究の一助となることを望む.

## 謝辞

本稿の骨子は, 近畿産業考古学会 2013 年度年次大会 (2013 年 11 月 16 日, 大阪教育大学) にて発表した.

また本稿の作成のみならず, 雑誌の電子化およびデータベースが可能となったのは, 大阪サイクリング協会元常任理事の西本啓氏, 会員の松丸雅亮氏, サイクルショップタケザワの武澤勇氏が永年, 雑誌を保管していただいていたおかげである. また一部の欠号に関しては自転車文化センター学芸員の村山吾郎氏に便宜を図っていただいた. 昭和 30 年代の事情については大阪サイクリング協会元広報の森本昭治氏に貴重な資料の提供をいただいた. また大阪サイクリング協会リーダー会の方々に当時の状況等の聴き取りにより判明したことも多い. 以上の方々に謝意を表する.

## 注

1) 2013 年 4 月 1 日に公益財団法人認定. 会長は谷垣禎一衆議院議員. 賛助会員 12,149 名 (2013 年 6 月現在) . http://www.j-cycling.org/

2) 1990 年 1 月 22 日没 (享年 70 歳).
(出典:OSAKA サイクリングニュース, No.310, 1990 年)

3) 一般財団法人自転車センター (関西サイクルスポーツセンター) (大阪市河内長野市) に事務局を置く. 会長は津山晃一氏 (株式会社キャットアイ代表取締役). 会員数 517 名 (2013 年 7 月現在).
http://www.kcsc.or.jp/oca/

4) http://cycle-info.bpaj.or.jp/

5) http://www.bikemuse.jp/

6) 八神史郎「舶来自転車の歴史伝える-半世紀かけ集めた欧米の年代物. 私設資料館で展示」2011 年 9 月 19 日,『日本経済新聞』

## 参考文献

赤池　学 (2011) :『平成 22 年度自転車活用による環境改善方策の調査研究事業-$CO_2$ 排出量の削減に寄与する「自転車通勤」自転車利用の広がりも展望して-』日本サイクリング協会, p.55.

大津幸雄 (1985a) :「自転車専門雑誌について」日本自転車史研究会会報『自轉車』No.21, pp.6-7.

大津幸雄 (1985b) :「愛輪と周防愛輪月報」日本自転車史研究会会報『自轉車』No.24, p.8.

竹内淳彦 (1960) :「大阪における自転車工場の分布とその立地」『新地理』8 巻, 4 号, pp.230-243.

田中幹大 (2009) :「戦後復興期大阪における自転車産業と中小機械金属工業」『経営研究』59 巻, 4 号, pp.43-78.

日本サイクリング協会 (1956) :「日本サイクリング協会の事業」『サイクリング』秋号, pp.66-67.

真船高年 (1986) :「日本輪界名鑑に見る大正中期の輪界関係出版社」日本自転車史研究会会報『自轉車』No.27, p.10.

疋田　智 (2003) :『自転車ツーキニスト』光文社, p.334.

谷田貝一男 (2009) :「昭和 30 年代における女性の自転車乗車率の上昇原因」『自転車文化センター研究報告書』第 2 号, pp.3-30.

谷田貝一男 (2011) :「シティサイクルの誕生と社会文化との関わりの歴史」『自転車文化センター研究報告書』第 3 号, pp.3-42.

STK66 (2012) :「自転車業界分析　その 3　自転車趣味人の世界ってどれぐらい?」
http://ameblo.jp/consultantview/entry-11282211571.html (2013.8 検索)